

**【研究主題】持続可能な社会の実現について考える社会科授業
～ループ図による思考の促進と効果について～**

【主張】

私は「社会科」の学習活動において、「地球規模の社会的諸課題や地域にみられる課題」(以下:「課題」)を自分事として捉え、持続可能な社会の実現に向けて、自分が協力できることを考える児童の育成を目指している。

しかし、これまでの実践では、次のA・Bのような問題があった。

A: 児童が「課題」を自分事として把握できておらず、今の社会や自分たちの暮らしがそのまま続くと思っている姿が見られた。その原因は、「課題」がもたらす影響について、児童に深く考えさせていなかったことにある。

B: 持続可能な社会の実現に向けて、自分が実際に協力できることについて、現実的に考えられない児童の姿があった。その原因は、社会で行われている取組の社会的な影響や効果を具体的に考えさせていなかったことにある。

そこで私は、「課題」を自分事として捉え、持続可能な社会の実現に向けて、自分が協力できることを考えられるよう、主に次の2つの手立てを講じることにした。

① 「課題」に関する事実や現状を提示し、それらが続いたり、改善されなかったりするとどうなるかを問い、ループ図に「課題」がもたらす影響を表すよう指示する(マイナスのループ図)。

こうすることで、子どもは「課題」がもたらす社会への影響を考え、自分たちにとってもよくないことであると気付く(課題を自分事としてとらえた姿)

② 社会で行われている(考えられている)取組を調べた児童に、このような取組を進めたり続けたりするとどうなっていくかを問い、取組から連想できる影響や効果を表すよう指示する(プラスのループ図)。その後、自分たちが協力できることを問う。

こうすることで、児童は「課題」を自分事として捉え、社会の仕組みや取組の中で自分が協力できることを、現実的に選択・判断して考えることができる。

1. 研究主題設定の理由

(1) 主題設定に至る児童の実態と問題点

これまでの私の授業では、児童が「課題」を他人事に捉えており、自分が実際に協力できることを考えられていない姿が多くあった。例えば人口減少を「課題」として取り上げた際、児童は人口が減少している事実に驚きや反応を示すものの、それが原因で自分たちの生活が維持できなくなる可能性に気付くことができなかった。また、調査や話し合い活動を行って「課題」解決のために自分に協力できることを調べた際には、調べて分かったことをそのまま自分が協力できることとして表す児童が多かった。この原因として、次のことが考えられる。

A: 児童に「課題」がもたらす社会的な影響について、深く考えさせていなかった。

「課題」を児童に捉えさせる場面で、教師が児童に身近な「課題」に関する情報を提示するだけで終わっており、その一つ一つの情報について深く考えさせていなかった。そのため児童は「課題」と自分との繋がりを意識することが難しく、「課題」が自分事にならなかった。

B: 児童に社会で行われている取組が続けられるとどうなるかを具体的に考えさせていなかった。

持続可能な社会に向けて自分にできることを考える場面で、教師が調べて分かったことを全体で共有するだけで終わり「自分に協力できることを考えよう」と安易に発問をするのみで、児童が調べたことや取組が今後続けられるとどうなっていくのかを考えさせていなかった。そのため児童は、調べたことがそのまま自分の協力できることに繋がってしまい、自分に協力できることを現実的に考えることができなかった。

私は、上述の問題点とその原因を踏まえ、児童が「課題」を自分事とし、自分に協力できることを現実的に考えられるようにするため、以下の方策と仮説を設定し、実践を通して検証していくこととした。

(2) 問題点解決のための方策

A について: 「T: 「課題」に関する事実や現状を提示して、C: マイナスのループ図で社会への影響を表す活動」を取り入れる。

B について: 「C: 社会で行っている取組をプラスのループ図で取組の影響や効果などを表す活動」の後に「T: 自分に協力できることは何かを問う発問」を取り入れる。

<手立てのモデル図>

≪児童が『課題』を自分事とし、自分に協力できることを考えることができる学習過程のモデル図≫

【『課題』を自分事とし、自分に協力できることを具体的に考えることができる】

自分に協力できることは何かを問う発問



自分に協力できることを選択・判断

検証2

取り組みをプラスのループ図で表す活動



社会で行っている取組の影響を具体的に考える

事実調査

『課題』を自分事とする姿

検証1

『課題』に関する事実や現状を提示してマイナスのループ図を作る活動



『課題』が自分にもよくないという気付き

(3) 研究仮説

- ① 「課題」に関する事実や現状を提示し、それらが続いたり、改善されなかったりするとどうなるかを問い、ループ図に社会への影響（マイナスのループ図）を表すよう指示する。これにより、児童は「課題」がもたらす社会への影響を考え、自分たちにとってもよくないことがあると気付く（「課題」を自分事としてとらえる）。
- ② 社会で行われている（考えられている）取組を調べた児童に、このような取組を進めたり続けたりするとどうなっていくかを問い、ループ図に取組の影響や効果（プラスのループ図）などを表すよう指示する。その後、自分たちが協力できることを問う。これにより、児童は社会の仕組みや取組に対して、自分が協力できることを選択・判断する。こうして、「課題」を自分事として捉え、持続可能な社会の実現に向けて、自分が協力できることを考える児童になる。

(4) 検証方法

上述の仮説について、主に児童の学習後の振り返り記述による検証を行う。検証の観点は以下の通りである。

- ≪検証1≫①の場面において、児童が「課題」を自分事としてとらえているか。
→「このままでは自分にとってもまずい」など自分にもよくないという内容を記述・発言している（ロイロノート）
- ≪検証2≫②の場面において、自分に協力できることを現実的に考えることができたか。
→自分が実際に協力できることを、なぜそうするといいのかなど理由を合わせて具体的に記述している。（ロイロノート）

2. 研究の実際

本研究について、以下2つの学年と単元で実践と検証を行った。

実践1	単元名「市の移り変わり」(全9時間) 令和5年度 新潟市立葛塚小学校第3年3組 28名
実践2	単元名「災害からわたしたちを守る政治」(全12時間) 令和6年度 新潟市立葛塚小学校第6年1組 30名

(1) 実践1 実践1における児童の実態は次の通りである。

これまで児童は、昔と今の写真を比べたり、年表を作ったりしながら、新潟市や自分たちの住んでいる北区葛塚の発展について学びを深めてきた（発表資料P1, ①）。①「課題」を自分事としてとらえる場面において、次の手立てを講じた。

<方策①について>

☆実践1における「課題」に関する事実や現状の提示（発表資料P2, ②）など
『葛塚地域の人口の減少・バスの本数の減少・葛塚祭りの露店数の減少・葛塚市の露店数の減少』

教師：資料を提示した後、『人口の減少』をスタートに「人口が少なくなるとどうなる？」と発問し、児童の発言・反応をもとに簡単なマイナスのループ図を作る。

その後、「こんな風に良くないループって他にも作れるかな？」と発問。他にもループ図を作ってみるように指示。

☆実践1におけるマイナスのループ図を作る活動（発表資料P3, ③）
『葛塚地域の「課題」について、個人やグループでループ図を連想して作る活動』

「課題」に対するマイナスのループ図を作った後の各児童の記述

A児：葛塚の人口が減るのがこのまま続くと、市のお店やバスが減ることにつながると思った。それは、買う人や乗る人が少なくなるからで、でもそうすると困る人がいて、どんどん来る人がいなくなって、どんどん人気なくなって、もっと人口が減ると思った。せっかくまつりとかもあって楽しいのに、このままだと最後は葛塚が無くなりそうで嫌だなと思った。

B児：葛塚も発展していると思っていたけど、グラフからいろんなものが減っていておどろきました。これからどうなるのか考えたら、人口が減ると困る人が出てきて、どんどん葛塚の人口が減ることにつながると思います。Aさんが葛塚がなくなるって言ってたけど、それは悲しいなと思いました。

C児：葛塚の人口が減って、いろんなものが減っていくと、もっと葛塚の人口が減ってしまうことになる。

≪検証①≫ A児◎ B児○ C児△（授業時児童数20人（インフルのため）の内 A評価2人 B評価6人 C評価12人）

A児、B児ともに『葛塚の人口が減る』とどうなるかを【市の露店数】や【バスの本数】の減少と結び付け、「課題」がもたらす影響を同グループで確認し合っていた。どちらもこのまま「課題」が続くことで、これまで以上に人口が減るのではないかと連想できていた。

A児はその際、「最後には葛塚が無くなっちゃうんじゃないか」とループした最終的なゴールを連想していた。「最後は葛塚が無くなりそうで嫌だ」という記述からも、自分のところに課題が近づいている（自分事）ことが分かる。

B児も「それ（葛塚が無くなること）は悲しい」という記述から自分のところに課題が近づいていることが分かる。B児は自分で自分事にたどり着いたのではなく、A児の発言を聞いたことで「課題」を自分事とすることができていた。

C児は個人で考えた後、別グループでループ図を作成していた。C児も【葛塚の人口が減る】とどうなるかを【市のお店も減る】【まつり】【バス】と結び付けて考えていたが、その後どうなるのかを上手く考えることができていない。C児は振り返りで、このままだとこれ以上に人口が減るといふ事実の深まりはあったが、自分事になっている記述は見られなかった。

<方策②について>

「このまま「課題」が続くと、葛塚の人口がもっと減ってやばい町になる」という考えが児童から生まれた。そのため、「葛塚をやばい町にしないために、どうしたらいいのだろう」という学習課題を立て、北区やそこに住んでいる人、大人がどんな活動をしているのか調査した。調査活動の一環で、北区観光協会の方から講話をいただいた（発表資料P3, ④）。そこで分かったことを基に、②児童が自分に協力できることを具体的に考える場面で、次の手立てを講じた。

☆実践1における【社会で行っている取組をプラスのループ図で表す活動】（発表資料P4, ⑤）
『北区観光協会の方からの講話などをもとに、調査したことをプラスのループ図で表す活動』

教師：調査活動を終えて、分かったことを全体で確認する時間をとり、「例えばイベントをするとどうなる」と発問。児童の発言を矢印で結んだ。

児童：「なんだか、前の無限ループみたいにループしそう」と発言

教師：発言を取り上げ、調査したことを続けるとどうなるかループ図に表すよう指示。

☆実践1における【自分に協力できることは何かを問う発問】

教師：出来上がったそれぞれのループ図を見て、上手くできた児童のものを全体で取り上げて確認。その後ループ図を見て

自分が協力できることは何があるか、理由も合わせて書くよう指示。
プラスのループ図から自分に協力できることを問うた後の各児童の記述
A児【自分に協力できること】 葛塚まつりとかのイベントに参加して、もっと葛塚を盛り上げる。 【そう考えた理由】 私はまつりを盛り上げて、もっと <u>いろんな人が楽しくなると、いいなと思う人が増えて、住みたい人も増える</u> と思った。 <u>私も葛塚まつりのときに子ども灯笼をするけど、その時にもっと盛り上げて、いろんな人にアピールしたらいい</u> と思った。
B児【自分に協力できること】 休みの日とかに葛塚市のイベントがあったら行ったり、家族で行ったりする。 【そう考えた理由】 私はイベントがあったら、自分も家族も行って、少しでもイベントを盛り上げていくと、 <u>楽しいイベントにはいろんな人が来てくれるから、住みたいと思ってくれる人がふえる</u> と思った。
C児【自分に協力できること】 ・みんなに新潟の魅力を伝える。 ・イベントに参加する 【そう考えた理由】 どんどんいろんな新潟に関するグラフを見たら減っていることに気がついたから、 <u>新潟の魅力を伝えたりイベントに参加する</u> といいから、葛塚祭りとか多人数で行った方がいいなと思った。

≪検証②≫A児◎ B児◎ C児○ (授業時児童数22人のうち、A評価3人、B評価11人、C評価8人)

A児は自分に協力できることとして、まつりを盛り上げてアピールすることを、ループ図をもとに自分の生活経験に照らし合わせて選択判断していた。なぜそうするといいいのかも、楽しくなると住みたくなる人が増えるのではないかと連想したことを記入していた。

B児は自分に協力できることとして、イベントに行くことをループ図をもとにして選択判断していた。イベントに家族と行って盛り上げることで、楽しいイベントに人が来てくれて、住む人も増えていくのではないかと記入していた。

C児はループ図を作った後に、「新潟の魅力を伝える」と記述しており、初め自分が協力できることを現実的に考えることが出来ていなかった。全体での共有の後、「イベントに参加する」という考えを受けて記述していたため、自分たちに協力できることはイベントへ参加することができることを考えていた点が評価できる。しかし、なぜ良いのかという理由を具体的に記述するには至っていなかった。

実践1の結果、「課題」を自分事にする場面や自分に協力できることを現実的に考える場面において、ループ図を使う手立てを取り入れることで、「課題」がもたらす影響や効果を考え、「課題」を自分事にしたり、自分に協力できることを現実的に考えたりする際の判断材料にすることが出来ていた。一方で、「課題」を捉える場面ではループ図を上手く作れない児童がいたり、作った後に自分との関わりの部分で上手く連想できない児童がいたりするという課題があった。

それを克服するために、実践2では、まずクラス全体で同じマイナスのループ図を作った。その後、出来上がったマイナスのループ図に自分が連想したことを付け加えていくことで、「課題」が自分事になるように手立てを工夫した。

(2) 実践2 実践2における児童の実態は次の通りである。

実践2における児童の実態は以下の通りである。(発表資料P5資料⑥)

これまで児童は、R6年1月の起きた能登半島地震を軸に、地震の規模、新潟の被害、新潟の支援、新潟の復旧復興について学習を進めてきた。実際に児童の自宅や身近な所(北区葛塚)で大きな被害が出たわけではなかったため、災害が起きても自分たちの暮らしはこのまま続いていくと思っている姿(他人事)が見られた。①「課題」を自分事としてとらえる場面において、次の手立てを行った。

<方策①について>

☆実践2における「課題」に関わる事実や現状の提示 『R5奥能登地震後、その復興最中にR6能登半島地震が起きた事実』(発表資料P8資料⑦) 復旧復興したことで、町やこれまでの生活が元通りになると考えていた児童に、このような大きい被害の地震は何度も来る可能性があること、それはいつ来るか分からないことを捉えさせる。 『能登半島地震による新潟市西区の被害のafterの写真と人口流出の新潟日報記事』(発表資料P8、⑧) 復旧復興には時間がかかることを捉え、実際に大きな被害があった場合、その場に留まることはできない現状を提示する。
☆実践2における児童全員で同じループ図を作る活動 教師：これまで学習に使用したシートをもとに、クラス全体で一緒にマイナスのループ図を作る。その後、
☆実践2における【マイナスのループ図に個人で連想したことを付け足していく活動】(発表資料P8資料⑨) 全体で作ったループ図に社会にもたらす影響や自分との関係などを連想し、付け足していくよう指示する。
「課題」に対するマイナスのループ図を作った後の各児童の記述
D児：1月の能登半島地震があって、僕の家は別に被害がなかったけど、地震の被害をもう一度考えたときに、もしかしたらこの後もっと大きな地震が起きて被害が出て、自分の家に住めなくなることもあると思った。そうしたら引越しましや転校することになるかもしれないし、そうなったら友達とも離れることになるかもしれないと嫌だと思った。そうならないような被害が少なくなったり、あまり出ないような復旧復興が大切になると思った。
E児：初めは地震が起きて、支援や復旧をしたら元通りになって終わりだと思っていました。だけど新潟の今の復旧を見て、復旧は思っているよりも時間がかかっていたし、復興して元通りにしても、また大きな地震があったらまた被害が出て、またお金がかかたりしてしまうことが分かりました。今は大丈夫でもまた大きい地震があったらどうなるか分からないし、もし自分の家が被害にあったら、避難したり家が崩れたりして暮らせなくなってしまうと思って安心してられないなと思いました。
F児：最初の社会の勉強の時に、地震で被害があったら早く復旧すればいいだけだと思っていただけで、また地震が来たときに、前よりも強い地震が来たりすると何度も繰り返すようになってくれないということが分かりました。

≪検証①≫D児◎ E児◎ F児○ (全児童30人中 A評価7人 B評価17人 C評価6人)

D児は事実から分かったことや連想したことをマイナスのループ図に付け足していく中で、家が崩れることで引越しましや転校することに繋がると考えた。「友達と離れることになるかもしれないと嫌だ」という記述から、これまで1月の地震の被害において

他人事だったが自分事になったことが分かる。

E 児は事実から分かったことや連想したことをマイナスのループ図に付け足していく中で、様々な場所にお金がかかることを事実として捉えていた。また、自分との繋がりの中で、「もし自分の家が被害にあったら～暮らせなくなってしまうと思って安心してられない」という記述から、「課題」を自分事としていることが分かる。

F 児は事実から分かったことや連想したことをマイナスのループ図に付け足していく中で、地震はいつでも来る可能性があるという事実に着目して、それをもとにした振り返りでは繰り返すとよくないという事実に触れていた。自分にとってどうよくないかが記述されていなかったため、どうしてよくないのかを発問するべきであった。

<方策②について> (発表資料 P 9, ⑩)

地震は何度も起きる可能性があること、被害が起きた際に自分たちに被害が出たらこれまでの生活ができなくなることを捉えた児童は、新潟市や大人は何か対策していないのかを調査した。その際、新潟市北区役所総務課の方や、新潟市役所にて災害に関する講話をいただき、新潟では災害に強い持続可能なまちづくりを目指していること、そこに繋がる事業などを知った。

☆実践 2 における【社会でしている取り組みをプラスのループ図で表す活動】(発表資料 P 1 0, ⑪) 『災害に強い持続可能なまちづくりを進めると、どうなっていくのかをループ図に表す活動』
教師：新潟市では、どんな対策をしているのかを確認し、児童の発言からプラスのループ図を作成していく。
☆実践 2 における【自分に協力できることは何かを問う発問】 教師：児童が考えた、「工事を手伝う」「募金をする」「備蓄品をそろえておく」「水を多めに持って行く」などがループ図のどこに位置付くかを考えるよう発問。机間巡視の後、「税金を払う」と記述していたものを取り上げ、なんでそう考えられるのかを確認。児童の言葉から『税金を納める』をスタートに全体でループ図を作成(発表資料 P 1 0, ⑫)
プラスのループ図から自分に協力できることを問うた後の各児童の記述
D 児：「災害に強い持続可能なまちづくり」のために、僕ができることは税金を納めたり、選挙に行くことが出来ると思った。税金を納めることで工事のための予算に繋がるし、選挙に行ったりすると、政治をしっかりとくれそうな人を選ぶことができるからいいと思った。僕は選挙は出来ないけど、大人になったらしっかりと選挙に行きたいし、選挙があったら親に言うことで協力できると思った。納税も義務だし消費税とかをしっかりと納めていきたい。
E 児：初めは自分に協力できることはあまり分からなかったけど、かかっているお金が税金だと分かったので、税金をしっかりと納めていくと予算も上がって、より災害に強いまちになっていくと思いました。だから自分にできることが税金を納めることだと思いました。選挙も今は出来ないから初めは意味ないと思っていたけど、家族に選挙があることを言うことはできるので、それはできると思いました。
F 児：協力できることを考えてみて、災害に強い持続可能なまちを作るためには、選挙は大切だとわかりました。なのでこれから 18 歳になったら、選挙で政治をしっかりとくれそうな人を選びたいです。選挙で政治をしっかりとくれそうな人を選んだ後は納税をしたいです。

【検証②】D 児◎ E 児◎ F 児○ (全児童 3 0 名中 A 評価 1 0 人 B 評価 1 2 人 C 評価 8 人)

D 児は、自分が協力できることとして、「税金を納めたり、選挙に行く」ということを記述しており、なぜそうするといいのか「税金を納めることで工事のための予算に繋がるし、選挙に行ったりすると、政治をしっかりとくれそうな人を選ぶことができるから」と記述することが出来ていた。また、選挙に至っては、大人になったらしっかりと行くということに加え、今の自分に協力できる「親に言う」ということを現実的に考えることが出来ていた。

E 児は、D 児と似ていて自分が協力できることとして「税金を納める」「家族に選挙があることを言う」を挙げていた。それは、ループ図で考えた影響と自分との関わりとを考える中で、自分が現実的に協力できることを判断したということができる。

F 児は、「選挙で政治をしっかりとくれそうな人を選ぶ」「納税をしたい」という記述から、選挙と納税は災害に強い持続可能なまちづくりのために、自分が協力できることだと考えることが出来ていた。しかし、なぜそうするといいのかという理由についての記述がなかった。

全体で一貫してループ図を確認しながら作成したことで、社会が行っている取組の影響を具体的に考えることへ繋がっていた。また、出来上がったループ図に立ち返り、自分たちとの繋がりを考えたり、既習事項との繋がりを想起したりすることが、自分に協力できることを現実的に考えることに繋がっていた。「災害からまちを守る政治」の單元において、税金や選挙などの既習事項を取り上げて、自分たちに協力できることに結びつけられたことが成果の 1 つであった。

3. 結論

- ① 教師が「課題」と関係する事実や現状を提示した後、児童が「課題」を自分事に捉える場面で、マイナスのループ図を個人または全体で作成し、「課題」がもたらす影響について考えさせることで、児童が「課題」を自分事にすることができていた。
- ② 持続可能な社会の実現について自分にできることを考える場面で、社会の取組をプラスのループ図で表して、その影響や効果を考えることで、自分が調べたり考えたりした協力できることを今一度見直し、より具体的に協力できることを考えることができていた。

それぞれの場面でループ図を使うことによって、「課題」や取組の社会的な影響や効果を連想し、自分の生活経験や既習事項を繋げていくことができていた。そうすることで、「課題」にどんな影響があるのか、「課題」はなぜ自分たちにもよくないのかを捉え、児童は「課題」を自分事にすることができていた。また、自分にはどんな協力ができるのかを関連させ、より具体的に協力できることを考えることを補助するという役割がループ図に見受けられた。

授業中に一度ループ図を作ってしまったら、同じような矢印を引いた際に、「あっ！もしかしてループしちゃうんじゃない？」とループ図を想起して、その後の展開や影響を考えやすくなっていた点もループ図を活用した利点であった。

4. 今後の課題

ループ図を作る活動では、3 学年・6 学年ともに、個人作業では上手くループ図を作成することができなかった児童もいた。それについては、これまでの生活経験上ループ図を作ったことがない児童が多く、初めての活動に上手く取り組みなかった点がある。まずは様々な場面において、ループ図を使ったり、影響や効果を具体的に考えて繋げていったりする活動を取り入れることが大切であると考える。

今回の研究において、ループ図を個人または全体で作ることにした。児童の様子を見ていると、複数グループで話し合いながら作った方がより多様な考えが繋がっていくと考えられたが、その検証には至らなかった。どのようなループ図の作成方法にすると、児童がより「課題」を自分事にし、より協力できることを考えられるのかを検証していくことも必要であった。